



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

National Survey on Over-Adaptation of Junior and Senior High School Students with Intellectual Disabilities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山,友菜, 橋本,創一, 日下,虎太郎, 竹達,健顕, 廣野,政人, 尾高,邦生, 野元,明日香, 三浦,巧也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173614

知的障害のある中学・高等部生徒の過剰適応に関する全国調査

杉山 友菜*¹・橋本 創一*²・日下虎太郎*³・竹達 健顕*³・廣野 政人*³
尾高 邦生*⁴・野元明日香*⁵・三浦 巧也*⁶

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

(2021年9月13日受理)

1. はじめに

本研究では、知的障害のある中学・高等部生徒の過剰適応に着目した。

過剰適応とは、外的適応が過剰なために内的適応が困難に陥っている状態（桑山，2003）¹）であり、様々な心理的問題を生じやすいことが指摘されている。例えば、石津・安保（2008）²）は中学生の過剰適応傾向と抑うつとの間に正の関連があること、益子（2009）³）は高校生の過剰適応傾向と抑うつ・強迫・対人恐怖の間に正の関連があることを明らかにしており、過剰適応傾向の子どもは思春期・青年期に問題が表面化しやすいことが考えられる。

これまで、過剰適応における検討は、その多くが障害のない中高生（定型発達の生徒）を対象としており、知的障害児者を対象とした研究はほとんどなされていない。

しかし、菅野（2005）⁴）や西郷・橋本（2014）⁵）は知的障害者の退行や精神疾患の背景要因の一つに過剰適応を挙げており、生活の場や仕事の場で頑張りすぎてしまったり、幼少期から日常的に頑張りすぎていたことがきっかけとなって青年期や成人期に精神症状が現れるケースがあることを指摘している。また、横田ら（2018）⁶）は、自閉スペクトラム症（ASD）の過剰適応と精神症状についての臨床事例を報告している。ASDの過剰適応は知的な遅れがないケースから重度知

的障害者までしばしばみられる特徴であり、コミュニケーションや実行機能の制約などASDの障害特性が根底にあり発現している可能性があることから、それらのメカニズムを理解し予防や治療に役立てることの重要性が同論文において論じられている⁶）。

これらを踏まえると、知的障害児者も過剰適応を起こし、心理的問題への発展リスクを有していることが考えられる。知的障害者において、成人期に過剰適応の問題が表面化するケースが少なくないが、そのような場合、成人期以前の段階で何らかの過剰適応の兆候があることが推測される。定型発達の生徒では過剰適応の問題が表面化するの思春期・青年期であることが多いことから、知的障害者の場合も、その症状が深刻化する以前の中学部・高等部在籍段階での早期支援が求められるであろう。

そこで本研究では、知的障害のある中高生にみられる過剰適応の実態把握と、その状態像などを整理し、有効な支援を検討することを目的とする。なお、本研究では教員に質問紙回答を求めたことから、第三者が客観的に観察可能な「外的適応の過剰さ」のみを取り上げ、過剰適応を「場面や状況にふさわしい（うまくあてはまる）ように行動しようと、必要以上に努力すること」と定義して調査した。本来、本人が訴える適応感やそれに向けた努力、不適応感、そのつらさなどを対象として、過剰適応の状況を把握する研究等が展開されることが多いが、本研究は、生徒とその環境・

* 1 東京学芸大学大学院 教育学研究科

* 2 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター（184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

* 3 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科

* 4 順天堂大学 スポーツ健康科学部（270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1）

* 5 志学館大学 人間関係学部（890-8504 鹿児島県鹿児島市紫原1-59-1）

* 6 東京農工大学大学院 工学研究院（184-8588 東京都小金井市中町2-24-16）

状況から、あくまでも明確にみられる外的な行動、症状や現象などを捉えて、過剰適応と判断されるものを研究対象としており、従来の研究とは異なる。

2. 方法

2. 1 対象者

全国にある知的障害特別支援学校の中学部624校・高等部715校、計1339校の教員を対象に質問紙調査を行った。なお、各校回答者は1名とし、その選出は各校に一任した。返答のあった、中学部教員288名(教員歴平均14.5年(SD=9.3))・高等部教員334名(教員歴平均15.1年(SD=9.2))、計622名を分析対象とした(回答率46.4%)。

2. 2 調査手続き

2020年7月に、対象とした特別支援学校に質問紙を郵送し、各教員が質問項目に回答した後に直接返送してもらった。

質問紙は、(1)フェイスシート、(2)実態調査、(3)事例調査、で構成し、回答を求めた。

なお、倫理的な配慮として、集めたデータは統計処理をするため学校名や個人が公表されることは一切ないこと、結果については学術的な目的以外に使用しないことを質問紙に明示し承諾を得た。

2. 3 調査内容

場面や状況にふさわしい(うまくあてはまる)よう
に行動しようと、必要以上に努力すること

本研究では、過剰適応を上記のように定義し、質問紙に明記したうえで、以下の質問への回答を求めた。

2. 3. 1 実態調査

現在担当する生徒の中に、過剰適応を示す生徒がいるかについて、「いる」「いない」「その他」から選択で回答を求めた。また、「いる」との回答の場合、過剰適応を示す生徒の人数を記入してもらった。

2. 3. 2 事例調査

現在または過去に担当する(した)過剰適応を示す生徒を1名取り上げ、以下の回答を求めた。

①基本情報として、過剰適応を示す生徒の学年・知的障害の程度・障害種をそれぞれ選択式で回答を求めた(障害種については複数回答可)。②過剰適応の具体的な様子を自由記述で回答を求めた。③生徒の心理的狀態として、ストレス反応と自己肯定感について

回答を求めた。ストレス反応については、生徒に何らかのストレス反応がある場合、表出している症状を自由記述により回答してもらった。また、自己肯定感については、「高い」「少し高い」「どちらともいえない」「すこし低い」「低い」の中から選択により回答してもらった。④生徒の今後について教員が心配なことを自由記述で回答を求めた。⑤現在(または当時)行っている(いた)指導支援の方法を自由記述で回答を求めた。

2. 4 分析方法

数値記入や選択式の回答は、単純統計とし、頻度や割合の算出を行った。また、自由記述の回答は、著者と指導教員でKJ法によってカテゴリー化し、分析を行った。

3. 結果と考察

3. 1 実態調査

分析対象となった教員のうち、担当生徒らの中で過剰適応を示す生徒がいると回答した教員は、中学部で79名(27.4%)、高等部で141名(42.2%)、総数は220名(35.4%)であった。また、過剰適応生徒の人数は、中学部で97名(担当生徒数が計1,604名に対して6.0%)、高等部で194名(担当生徒数が計2,708名に対して7.2%)、総数は291名(担当生徒総数の計4,312名に対して6.7%)であった。校種間において過剰適応を示す生徒の割合に大きな差はなく、1クラス8名の学級を想定した場合、2学級に1名程の過剰適応を示す生徒が在籍する可能性があることが示唆された。

3. 2 事例調査

事例調査で取り上げられた過剰適応を示す生徒は中学部135名、高等部196名の計331名の生徒であった。

3. 2. 1 過剰適応を示す生徒の基本情報

まず、学年について、中学部1年43名(13.0%)、2年36名(10.9%)、3年52名(15.7%)、高等部1年66名(19.9%)、2年60名(18.1%)、3年65名(19.6%)、その他・未記入9名(2.7%)であった。続いて、知的障害の程度は、なし・境界域58名(17.5%)、軽度157名(47.4%)、中度59名(17.8%)、重度12名(3.6%)、その他・不明45名(13.6%)であった。そして、障害種(疑い含む)は、ASD162名(48.9%)、ADHD53名(16.0%)、LD9名(2.7%)、ダウン症9名(2.7%)、その他30名(9.1%)であった(複数回答可)。知的障害軽度の生徒や、

ASDのある生徒が過剰適応を起こしやすい傾向がうかがわれた。

3. 2. 2 過剰適応の具体的な様子

過剰適応の具体的な様子についてKJ法で分類した結果を表1に示す。1~3のカテゴリーのように对他者に向けて過剰に努力する様子と、4~6のカテゴリーのように自分自身に過度な負荷を課す様子があることが明らかになった。おおよその様子は、定型発達児を対象とした研究と同様・類似するものであった。一方、「4. 能力超過」にみられる、自分の能力を大きく超えた課題に取り組んだり、本人が気づかないままに無理をしている姿は、定型発達児を対象とした先行研究では焦点が当てられておらず、知的障害のある生徒に特有な姿であることが考えられた。

3. 2. 3 生徒の心理的状态

ストレス反応を示している生徒が317名 (95.8%)と顕著に多いことが明らかとなった。表出している症状については、KJ法により「身体面」「心理面」「行動面」に分類することができ、症状が複合してみられる生徒は244名 (73.7%)であった。また、生徒の自己肯定感について、「高い」が4名 (1.2%), 「少し高い」が46名 (13.9%), 「どちらともいえない」91名 (27.5%), 「少し低い」が116名 (35.0%), 「低い」が69名 (20.8%), その他・未記入が5名 (1.5%)であり、自己肯定感の低い傾向が明らかとなった。以上の心理的状态を考慮し、心理面のケアを行っていく必要があると考えられる。

3. 2. 4 生徒の今後について心配なこと

生徒の今後について回答教員が心配なことをKJ法で分類した結果を表2に示す。「1. 適応」に関する記述がおよそ半数を占め、対人トラブルへの発展や継続した就労ができるか等の心配が挙げられた。また、サブカテゴリーで最も多かったのは「ストレス・精神的疲弊」であることも踏まえると、過剰適応による心理的負荷が蓄積することで不適応症状を示していく可能性が懸念され、長期的な見通しを持った対応が必要となると考えられる。

3. 2. 5 指導・支援の方法

指導・支援の方法をKJ法で分類した結果を表3に示す。「1. 予防的対応」からは、モデルの提示や本人の意思を確認するなどして過剰な取り組みを事前に回避する工夫をしていること、また、「2. 長期的な取り組み」からは、成功体験やソーシャルスキル獲得を支援することを通して、生徒本人が自信や適切な対処法を身につけられるよう取り組んでいることが明らかとなった。また、数は多くないもののサブカテゴリーに「家庭との連携・家庭への支援」や「関係機関との連携」が挙げられたことから、学校で頑張りすぎることによるストレスが家庭など学校外の生活場面で表出されるケースがあることも考えられる。このようなことから、過剰適応を示す生徒の学校内外の姿の違いなどにも配慮し、多角的に理解していくことで的確な指導支援につながると考えられる。

表1 過剰適応の具体的な様子 (n=588)

カテゴリー	サブカテゴリー	
1. 他者順応 195件 (33.2%)	他者からの要求や指示に従順である	97件 (16.5%)
	他者や雰囲気に合わせて	71件 (12.1%)
	無理に集団に参加する	27件 (4.6%)
2. 他者評価 74件 (12.6%)	承認欲求が強い	46件 (7.8%)
	評価に敏感である	28件 (4.8%)
3. 他者配慮 52件 (8.8%)	他者の役に立とうとする	33件 (5.6%)
	他者に気配りをする	19件 (3.2%)
4. 能力超過 113件 (19.2%)	自分の能力・実力から大きく離れた課題に取り組む	73件 (12.4%)
	自分のストレス状態を理解できず無理をする	40件 (6.8%)
5. 完全主義 68件 (11.6%)	目標や課題に対して完全を追求する	53件 (9.0%)
	規範や秩序に忠実である	15件 (2.6%)
6. 抑制 59件 (10.0%)	自分の気持ちを抑圧する	43件 (7.3%)
	援助要請ができない	16件 (2.7%)
7. その他 27件 (4.6%)	その他	27件 (4.6%)

表2 生徒の今後について回答教員が心配なこと (n=450)

カテゴリー	サブカテゴリー	
1. 適応 205件 (45.6%)	人間関係の構築・対人トラブルへの発展	48件 (10.7%)
	職場での適応・継続した就労	41件 (9.1%)
	自傷・他害行為等の行動問題	34件 (7.6%)
	所属コミュニティへの適応・継続した参加	25件 (5.6%)
	回避行動・活動意欲の低下	18件 (4.0%)
	不登校・引きこもり	17件 (3.8%)
	社会生活全般・自立	13件 (2.9%)
	本人にあった進路選択	9件 (2.0%)
2. 本人の課題 87件 (19.3%)	抱え込まずに援助要請できるか	40件 (8.9%)
	感情を自分でコントロールしていけるか	24件 (5.3%)
	自己肯定感・自信の低下	14件 (3.1%)
3. 健康面 77件 (17.1%)	本人らしさがなくなること	9件 (2.0%)
	ストレス・精神的疲弊	54件 (12.0%)
	身体の不調	18件 (4.0%)
4. 周囲の対応 54件 (12.0%)	精神疾患への移行	5件 (1.1%)
	今後適切な支援がなされるか	21件 (4.7%)
	本人への理解	16件 (3.6%)
	保護者との関係性・家庭環境	10件 (2.2%)
5. その他 27件 (6.0%)	本人が安心できる環境があるか	7件 (1.6%)
	その他	27件 (6.0%)

表3 指導・支援の方法 (n=624)

カテゴリー	サブカテゴリー	
1. 予防的対応 197件 (31.6%)	モデルの提示・取り組みへのアドバイス	51件 (8.2%)
	本人の意思の確認・尊重	41件 (6.6%)
	適度な活動内容・課題の設定	36件 (5.8%)
	励まし・安心できる言葉かけの工夫	35件 (5.6%)
	活動をわかりやすくする指導の工夫	34件 (5.4%)
2. 長期的な取り組み 163件 (26.1%)	成功体験を積めるよう支援	56件 (9.0%)
	ソーシャルスキルの獲得	32件 (5.1%)
	自己肯定感への配慮	27件 (4.3%)
	自己決定・自己解決能力の向上	26件 (4.2%)
	自己理解の促進	12件 (1.9%)
3. 心理面のケア 89件 (14.3%)	無理のない登校支援	10件 (1.6%)
	話を聞く・気持ちを聴きとる	51件 (8.2%)
	振り返りの機会	19件 (3.0%)
	一人になる時間の確保	10件 (1.6%)
4. 支援体制について 76件 (12.2%)	気分転換・リラクセス法の実施	9件 (1.4%)
	個別指導・相談機会の設定	29件 (4.6%)
	家庭との連携・家庭への支援	17件 (2.7%)
	安心できる環境の工夫	12件 (1.9%)
	関係機関との連携	8件 (1.3%)
	教員の共通理解	5件 (0.8%)
5. 指導支援における態度 73件 (11.7%)	スクールカウンセラー・コーディネーターとの連携	5件 (0.8%)
	受容的・共感的な態度	49件 (7.9%)
	信頼関係の構築	18件 (2.9%)
6. その他 26件 (4.2%)	生徒に合った心理的距離感	6件 (1.0%)
	その他	26件 (4.2%)

4. まとめ

本調査から、知的障害のある生徒の6.7%に過剰適応がみられるという結果が得られ、今後さらに知的障害のある過剰適応を示す生徒への対策と有効な支援を検討していく必要がある。事例調査で挙げた「自分の能力を超過した取り組みをしてしまう」という過剰適応の様子は、知的障害による自己管理や自己理解の難しさといった特性も要因の一つとなっている可能性が考えられる。また、過剰適応生徒のストレスの高さや自己肯定感の低下傾向からは、心理面に対するケアの必要性が示唆された。こうした過剰適応について、定型発達の中高生において顕著にみられることが指摘されており、知的障害のある生徒においてもほぼ同様な姿が認められたことから、思春期・青年期という年齢や学校・家庭環境、ライフイベントなどが共通して影響していることが推測される。加えて、過剰適応を示す要因について考えると、知的障害のある生徒本人の特性と特別支援学校中学・高等部という環境の両面が考えられる。前者において、知的障害による影響を詳しく検証すべきであろう。特に、過剰適応を示す生徒の約半数は、知的障害が軽度の者であったことは特筆すべき点である。学校内では比較的理解力が高く、活躍する姿が多いことが推測され、先に述べた自己理解・自己管理の難しさに加え、周囲からの期待などに応えたいという生徒の思いが考えられる。また、後者の場合、特別支援学校中学・高等部のカリキュラムや学習活動などを見直していく必要もあろう。本調査結果のみでは不明な点が多く、引き続き詳細に検討していくべきである。一方、心理的負荷が蓄積することで、将来的に不適應となる可能性も懸念されており、長期

的な見通しを持った対応も必要となる。

最後に本研究の限界として、あくまで教員からみた「過剰適応」であり、生徒本人の内的な適応状態について扱っていないことが挙げられる。その点に留意して結果を取り扱う必要があるとともに、今後の課題として、生徒本人の内面に関してより詳細に検討していくことが求められるだろう。

文献

- 1) 桑山久仁子: 外界への過剰適応に関する一考察: 欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要 (2003), 49, pp481-493, 2003
- 2) 石津憲一郎・安保英勇: 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響, 教育心理学研究56, pp.23-31, 2008
- 3) 益子洋人: 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連 - 高等学校2校の調査から -, 学校メンタルヘルス, Vol12 No.1, pp69-76, 2009
- 4) 菅野敦: 退行を示した青年期・成人期知的障害者に対する地域生活支援と社会参加の促進に関する研究 - 退行の類型と予防 -, 発達障害支援システム学研究, 第4巻 第1・2号合併号, pp.35-46, 2005
- 5) 西郷俊介・橋本創一: 知的・発達障害者における20代を中心とした退行による支援ニーズ: 障害福祉サービスを対象とした調査結果から 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 10, pp33-42, 2014
- 6) 横田圭司・千田若菜・飯利千恵子・斉藤由美: 知的障害と発達障害をめぐるトランジション, 児童青年精神医学とその近接領域, 59 (5), pp566-576, 2018

知的障害のある中学・高等部生徒の過剰適応に関する全国調査

National Survey on Over-Adaptation of Junior and Senior High School Students with Intellectual Disabilities

杉山 友菜・橋本 創一・日下虎太郎・竹達 健顕・廣野 政人
尾高 邦生・野元明日香・三浦 巧也

SUGIYAMA Yuna*¹, HASHIMOTO Soichi*², KUSAKA Kotaro*³, TAKETATSU Toshiaki*³,
HIRONO Masato*³, ODAKA Kunio*⁴, NOMOTO Asuka*⁵ and MIURA Takuya*⁶

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

Abstract

This study investigated support methods effective for junior and senior high school students with intellectual disabilities by identifying their actual over-adaptation and state image. We conducted a questionnaires survey with teachers of special needs schools for children with intellectual disabilities. The results indicated that 6.7% of junior and senior high school students with intellectual disabilities were over-adapted, similar to typically developing children. However, unlike typically developing children, children with intellectual disabilities exceeded their abilities in trying, which might be caused by characteristics of intellectual disabilities such as self-management and self-understanding difficulties. Moreover, teachers try to prevent students' over-adaptation through prospective preventive measures from a long-term perspective. One limitation of this study was that over-adaptation was assessed only from the teachers' perspective. It is necessary to focus on students' inner being and investigate it in more detail in the future.

Keywords: over-adaptation, intellectual disability, junior and senior high school students

Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

* 1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

* 2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

* 3 The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

* 4 Juntendo University (1-1 Hirakagakuendai, Inzai-shi, Chiba 270-1695, Japan)

* 5 Shigakukan University (1-59-1 Murasakibaru, Kagoshima-shi, Kagoshima 890-8504, Japan))

* 6 Tokyo University of Agriculture and Technology (2-24-16 Naka-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8588, Japan))

要 旨

本研究の目的は、知的障害のある中高生にみられる過剰適応の実態把握とその状態像などを整理し、有効な支援を検討することである。知的障害特別支援学校の中学部と高等部の教員を対象に質問紙調査を行った。その結果、知的障害のある中高生の6.7%に過剰適応がみられることが明らかになった。また、定型発達の生徒と同様の過剰適応の姿がみられた一方、自分の能力を超過した取り組みをする姿は、自己管理や自己理解の難しさといった知的障害の特性が背景にあると考えられた。それに対し教員は、過剰適応が起こることを事前に予防したり、長期的な視点を持った対応を行っていることが明らかとなった。ただし、あくまで教員からみた過剰適応であることが本研究の限界であり、今後は生徒本人の内面に焦点をあて、より詳細に検討していくことが求められるであろう。

キーワード：過剰適応，知的障害，中学生・高校生

